

方舟謝肉祭 ④

高橋文樹

Chapter ONE……回想メモリアルがやってきたヤアヤアヤア！

晴れて三文文士は八月の屋久島へ……となるはずだったが、そうはならなかった。一緒に行くはずだった元彼女が急に連絡を絶ったからだ。原因はよくわからない。新しい彼女でもできたのだろう。

ともあれ、この知らせは僕をひどくがっかりさせた。樹齡ウン千年という縄文杉を見たかった、というのもあったけれど、一月ぶりのセックスがお預けになったのが大きい。性の問題が不首尾だと、人生がすべてうまくいかないと思ってしまうものだ。実際、性と金で人生の大半を占めている。

屋久島で使うつもりだった十万強の金。僕はそれを眺めながら、使い道について模索した。ちまちまと貯めてもしょうがない。どうせなら少しでも創作に役立つことに、とならねば小説家失格だ。

一体なにがいろいろか？ 国書刊行会の箱入りセリーヌ全集がちょうど同じくらいの値段だが、今の僕がしなくてはいけない投資とは、そういうことではなかった。

僕はあくまでフィクションにこだわっていて、その本懐とするところは文章表現力にあった（自分から書くと馬鹿みたいだが）。どんな腐った題材でも読ませてしまうのが小説家の力だと思っていたし、今も思っている。とはいえ、そう思っただけで書いた原稿の引き受け先がないのだから、大した表現力はないのだろう。おまけに、文章からにじみ出す性格もあまりいいものじゃない。日本には「信用ならない語り手」という設定に本気で怒るバカがたくさんいるのだ。

となると、ネタで勝負するしかない。ネタを集めるには取材が必要で、取材には取材道具が必要だった。

取材はそもそもノンフィクション作家の仕事だ。記者としての経験もなければ、みんなが内幕を知りたがっている機関（警察とか病院とか政治家事務

所とかアウトローな集団とか)に所属していたわけでもない。つまり、情報収集に有利な立場(マイノリティ)にいるわけじゃないのだ。僕がそういう人達に勝るとしたら、文献学的努力で上回ることは出来ない。例えば、国会図書館で埋もれている雑誌記事を使うとか、博物館入り寸前の古い落語を題材にするとか、そういうことだ。スパイの情報源も、その大半は雑誌とか新聞とかに因ると聞く。情報とはそうやって収集するものらしい。幸い、図書館はタダだ。

いろいろ考えた結果、不思議なことだけれど、僕が小説家の未来のために投資できるものはあまりなかった。結局、考えに考えた結果、僕はインタビュウで使いそうなICレコーダーだけを購入し、途方にくれた。

スキヤナーとフォトショップでも買って屋久島の写真を偽造しようかとも考えたが、最終的には祖母に謝りに行くことにした。たぶん、祖母は屋久島の写真を心の底から楽しみにしていたに違いない。しらんぷりしてお金を使いきれるほど、底意地悪くはなれなかった。

こういうとき、自分には小説家の才能がないんじゃないかと思う。高名な作家は廃嫡寸前まで金を使い込んだりする。僕もそうした方がいいんだろうか？

御茶ノ水で荻窪を通る中央線に乗り換え、トコトコ揺られながら景色を眺めていると、なんだかうちの一族は没落しつつあるなあ、という感慨が浮かんた。

僕が一人住む家は綾瀬にあった。常磐線と中央線では車窓からの風景でさえ気品が違う。足立区はやはり貧乏人の住む町だった。実際、僕は都心への距離のわりに安いという理由で綾瀬を選んでいる。それは必ずしも人間としての優劣を意味するわけではないが、やはり一つの墮落だ。ちなみに、祖母は麻布の女学校で山県有朋の孫の嫁と同級だった。僕の家は綾瀬で起きた女子高生殺害事件に荷担したと噂されている。なんともはや。

荻窪の瀟洒な住宅街にある祖母の家は、ブロック塀の上から桃の木をはみ出させている。庭木は手間の象徴であり、すなわち豊かさの象徴だ。出戻りの従姉が熱心に手入れすることで、春の盛りに花を咲かせる。ひがみっぽい比較になるかもしれないが、僕の家には二千元のフェイクグリーンがあるだけだ。忙しい貧乏人には、枯れない人工植物がよく似合う。

玄関を開けたWちゃんは、グリーンのフレームの眼鏡をかけていた。本を読んでいたらしい。僕とは違って穏やかな垂れ目に眼鏡をかけて読書などしている、いかにも清楚な感じだが、読書好きではない。暇をつぶすためだ

けの読書が楽しいはずもなく、むしろ僕の訪問に顔を明るくした。

「ちようどいいところに来た。お祖母ちゃんねえ、Fちゃんが帰ったすぐ後に骨折して大変だったんだから」

「どこを？」

「脚よ、脚。つい一昨日まで入院してたの」

「大丈夫なの、それで？」

Wちゃんは老人の骨がいかに折れやすいかを説明すると、からからと笑った。

「よくあるんだから。この間だって、胃癌だ胃癌だってきんぎん喚いて、調べてみたら肋骨が折れてたんだから。ねえ、お祖母ちゃん。牛乳飲まなきゃ駄目よ」

祖母は呼びかけに答ええない。むっとしたらしいWちゃんは、急に不機嫌を露わにして、「Fちゃんが来たよ」と二階へ上がってしまった。どたどたと大袈裟な足音が子供じみた怒りに聞こえる。

「おばあちゃん、脚の具合はどう？」と、僕はベッドに腰かけて尋ねた。

「ぜんぜん良くないよ！」

祖母は世の不正を訴えるという顔で、目の前の中空に怒鳴りつけた。

「散歩ができないのは困るね」

「そうだよ！ 散歩ができないのは困るよ！ なんとって足が折れたんだから！」

「なんで折れたの？」

「知らないよ！ おおかたカルシウムのせいでしょうよ！」

祖母はいかんともしがたい怒りに突き動かされている風だった。ある程度の時間がたてば老いさらばえなくてはならない、という自然の摂理そのものに怒っているようだ。世界が自分を冷遇している。その怒りは子供が自分の無力を呪うのにも似て、神聖な印象さえもたらした。

祖母の怒りをもっと聞きたい。そう思うと、ついつい従姉のことを話題にしていた。

「Wちゃんは何んだか少女時代に戻ったみたいだね。ふりふりしてさ。離婚したからかね」

「あの子はずっと少女のまんまだよ！ 旦那が一、二回火遊びしたぐらいで別れちまうんだからさ！」

「仕事をするつもりはないのかな？」

「私の身の回りの世話が仕事のつもりらしいよ！ この婆さんも、孫の雇用のために死ねないよ！ 私が死んだらWちゃんは失業者だよ！」

僕がげらげらと笑っていると、台所からWちゃんが恨めしそうな顔で見ていた。笑いの情性を持ったまま謝りに行くと、従姉はすっかりすねてしまつて、「Fちゃんは大卒だからいいよね」とめそめそする。

「でも今じゃフリーターだから、大卒のメッキも剥がれました。出ても出なくとも一緒だよ」

慰めのつもりでいったのだが、彼女は「違うよ」と腹を立てた。

「私のことなんて誰も雇わないんだから」

ますます泣きそうになる従姉が、この先の人生で何を支えに生きていくつもりなのか、僕にはあまり上手く想像できない。

「旦那さんとはまだ連絡取ってるの？」

Wちゃんはきつと僕を睨み、「もう離婚したから旦那じゃないでしょ！」と凄んだ。

「でもさ、向こうだつてそんなにすぐ再婚相手見つからないでしょ。夫婦喧嘩の延長みたいなもんじゃないの？ 仲直りできそうな気がするんだけど」

「Fちゃんまでそんなこというの！」

Wちゃんはまた二階へ上がって行ってしまった。たしかに「ちよつとの火遊びぐらい許してやれよ」と彼女は何度いわれたかしのれない。そんなちよつとのことならどうして我慢してくれなかったのか、というのが彼女の言い分なんだろう。プライドを傷つけるのが悪いのか、傷ついたプライドが悪いのか。どっちかはよく知らない。

Wちゃんが退場して気まずくなつてしまった。祖母は祖母で、「Wちゃんには世話になつてるよ！」という言葉をしおに黙りこんでしまう。僕は会話の糸口を探そうと努力し、今日の訪問の目的を思い出した。

「そういえば、屋久島には行けなかったよ」

「屋久島に行ったのかい？」

「違うよ。行けなかったんだ。一緒に行くはずだった人にキャンセル食らつてさ。一人旅もなんだし。ごめんよ、せつかくお小遣い貰つたのに」

「そりゃ残念ですこと！ 写真も見れないねえ」

「うん、行かなかつたんだから、写真もないよ」

祖母は憤懣やるかたなしという具合にため息をついた。なんだか今日は怒らせてばかりだな、と思つてみると、祖母はやおら立ち上がろうとする。脚はもうくつついたのだろうか？ カルシュームの問題はもう片付いたのだろうか？

「お祖母ちゃん、どうしたの？」

「Fちゃんがあんまりかわいそうだから、写真を見せてあげようと思つたん

だけでも！」

「それなら僕が取ってくるよ。またポツキリいったら困るからね」

祖母は「何いってますか！ 優しいの！」と笑った。それは何かの呪文のように聞こえた。

アルバムはこれも祖父の編纂によるらしく、百科全書のように多かった。しかも、きちんと日時詳細が書き込まれ、赤の他人が見てさえわかりやすくしてある。祖父のグロテスクここにきわまり。

僕は祖母の隣に腰かけながら、一緒に写真を眺めた。僕やWちゃんはおろか、僕の母や伯母が赤ん坊の頃の写真もあったが、それよりずっと古い写真の方が祖母の記憶を刺激するらしく、解説が多く聞ける。東京大空襲に遭った直後、焼け野原となった武蔵野の写真も見られた。

どうということない家族写真でも、ずらりと編集すればそれなりに見えるものだ。曾祖父の白黒肖像写真など、一族に由緒を与えとでもいうように薄くかすんでいた。

「これがお祖父ちゃんの家族？」

僕が指したのは、一番はじめのページにあった、家族七人の写真だった。「大正十年七月七日」と記されている。中年の男が真中に一人、その前にずらり四人の少年。左奥には年配の男が一人。右奥にちよこんと中年の女が一人。当時珍しかった写真に緊張したのか、笑っているのは一人もない。魂でも取られると思ったのか、一同不安そうに眉をひそめている。

「これがお祖父ちゃん？」

僕は四人並んだ内、一番不安そうな子供を指した。祖母は思い出を撫でるように写真を触った。

「神経質な感じがよく出てるね。まあ、兄弟みんな似ているかな。これは清輝伯父さん？」

僕は幼い祖父の隣にいる少年を指した。一人だけ姿勢がいい。着物の裾からのぞく脛には大きな傷があり、まだできたばかりのように見えた。

「違うよ！ 滅相もない！ これは晋作だよ！ 中国で犬死した例の二人組の片割れだよ！ 清輝さんはこっちの冴えないのだよ！」

祖母が指したのは、その隣の少年だった。だらりと後ろに手を組み、こまっしやくくれたへの字口をしている。いわれてみれば、清輝伯父さんの面影があった。

「じゃあ、残るこのガキが中国で死んじゃったもう一人の大伯父さんか」

「そうだよ！ 馨かおるっていうんだよ！ 女みたいな名前つけるから、意地にな

僕はいつものようにそう答えた。K一伯父さんは母の兄で、某経済団体のK団連でかなり上のポストについている。K団連生え抜きではこれ以上望めないぐらいの出世だそうだ。

「でも私、あんまり自信がないの」

「だからさ、世の中には閑職みたいな仕事があるんだって。いるだけでいいみたいな。そういうのならできるでしょ」

「それはそれでやりがいがないよ」

僕はこれ見よがしに溜息をついた。

「あのねえ、文句ばかり言ってるんで、動かなきゃ駄目だよ。待ってるだけじゃ何も変わらないよ」

「Fちゃんもそう言うんだ。私だってわかってるよ」

Wちゃんの温和な表情は、ますます弱々しくほどける。気弱で優しげなその目は、T美伯母さんとは似ておらず、外部の血によってもたらされたものだった。

傷つくことに同意しない限り、物事に進展はない。愚痴をいえば癒されたような気分になるだろうが、それはまやかしかだ。人は癒されるために生まれてきたわけじゃない。退屈な傷の舐め合いをしているうちに、人生は終わってしまう。

僕はトートバッグからアルバムを取り出した。

「このさ」と、例の家族写真を指す。「後ろの二人が誰かわかる?」

「何、これ何の写真?」

「お祖父ちゃんの家だよ。一番小さいのがお祖父ちゃんだったさ」

「ああ、じゃあ、真ん中のが宗光おじさんよ。左のが曾祖父さん」

「え、そうなの。まるで家長きどりじゃんか」

「なんかそういう人だったらしいよ。年の離れた兄弟で、父親代わりみたいだったって」

「じゃあ、なんであんなに嫌われてるわけ?」

「さあ、色々あったんじゃない? 何せ、昔のことだから」

Wちゃんはいいい終えると、再び例の愚痴に戻りそうな気配を見せた。僕は彼女の色々よりも、宗光おじさんの色々に興味があったので、「ここでもいいよ」と断り、すたすたと歩き出した。振り返ると、Wちゃんは恨めしそうな顔で突っ立っていた。まるで子供みたいにスカートの裾を掴んだまま。



—— (続く) ——